

「読解力」向上のための総合学級力の育成と「読解力向上の提言 10 か条」

大阪教育大学教授 田中 博之

これまで本報告書で見てきたように、子どもの「読解力」を向上させるためには、様々な教育のあり方が効果的であることがわかってきた。それは、第2章の「読解力向上に関する取り組み構造モデル」で示したように、まさに総合的である。

つまり、子どもの「読解力」の向上には、教師による全校的な取り組みが大切であるだけでなく、学校の管理職による多様な条件整備が必要であるとともに、家庭においても学校との連携において、読書習慣の形成や親子のコミュニケーションの活性化が重要な要因になっていることがわかった。

この結果を一言でいえば、大人の総合教育力の向上が子どもの「読解力」を伸ばすといえる。これは、既に考察したように「読解力」が真の意味での総合学力である以上、その向上には、前回の「基本調査 2004」で明らかになったように、学校と家庭が連携して総合教育力を伸ばすことが必要不可欠であることと結論的に一致している。

では、これから子どもの学力向上を、「読解力」という総合学力の一つの側面を含めて、さらに深く考えていくためには、どのような調査研究の進展が必要なのだろうか。

いいかえれば、子どもの学力向上において、より大きな影響力のある要因がまだ解明されないままになっていないだろうかという問いに答えることが求められているといえる。

ただし、私たちが学力調査の基盤にしている教育哲学は、「豊かな学力の確かな育成」であり、「バランス教育のすすめ」である。したがって、子どもの学力向上にとって大切な要因を、教科学力の知識・理解を直接的に高めるという限られた視点ではなく、より豊かな学力観の中に求めたいのである。

そこで私たち総合学力研究会が目にしたのが、子どもの集団で高め合う力とそれを伸ばすための総合教育力のあり方である。

1 学力向上に不可欠な子どもの人間関係力と集団力

人間は社会的な生物である以上、人間の学習もまた社会的に発生するものである。もちろん、ある技術の習得のための個人練習や一人でわかるまで自力解決に取り組む習慣は、学習効果を向上させるために不可欠である。

いいかえれば、いつでもそばに誰かがいないと勉強できないとか、わからないことがあるとすぐ友だちや先生に答えを聞いてしまうという安易な学習態度を改めることなくして、学習の成立はないといってよい。学びにおける孤独に耐え、それを楽しむ力が、理解や技能に正確さと習熟を与えるのである。

しかしその逆に、私たちは、学びにおける励ましや応援を期待している社会的な存在であることもまた確かなことである。例えば、できるようになったことをほめても

2 総合学級力モデルの構想と調査項目

このような問題意識のもとに、私たち総合学力研究会が構想したのは、「総合学級力」という新しい学力要素のコンセプトである。

ここでいう総合学級力とは、子どもたちが学ぶ組織としての学級の中で、常に協働でチャレンジする目標を持ち、友だちとの豊かで創造的な対話を通して、規律と協調のバランスを保とうとする力である。

では具体的な力の領域や項目を検討する前に、総合学級力を構想するに当たって参考にした社会的スキルの研究を概観してみることにしよう。

筆者は、和田実(1994)によって作成されたスキル項目と、庄司一子(1994)による児童用社会的スキル尺度、さらに、佐藤正二(1996)による子どものスキルトレーニングで用いられる社会的スキルの項目を参考にして、次のような7領域21項目からなるリストを試案として作成してみた。

① 関係開始のスキル

- 新しい人間関係を積極的に作りだしていこうとする
- 年齢や国籍が違う人と積極的に友だちになろうとする
- いったん切れてしまった関係を作り直そうとする

② 自己主張のスキル

- 項目を明確にして人に頼むことができる
- 大切なことは相手やグループにきちんと自己主張する
- 相手の話をよく聞いて適切に応答する

③ 課題達成のスキル

- グループの中の自分の役割を適切に実行する
- 相手が喜ぶ行動を積極的にする
- 多様な人と共同で制作、演奏、計画などを行う

④ 協調維持のスキル

- 相手が喜ぶように自分の喜びや謝意を表現する
- 相手を不快にさせないように不満や怒りを制御する
- 頼まれたことは自分にできる限り応じる

⑤ 問題解決のスキル

- 自分の誤りを素直に認めてあやまる
- グループ内の失敗やトラブルをねばりづよく解決する
- グループ間に生じたトラブルの改善に努力する

⑥ 共感共有のスキル

- 相手の成功を共に喜びあう
- 相手の悲しみに共感して励ます
- 貴重な資料や情報は共有して活用する

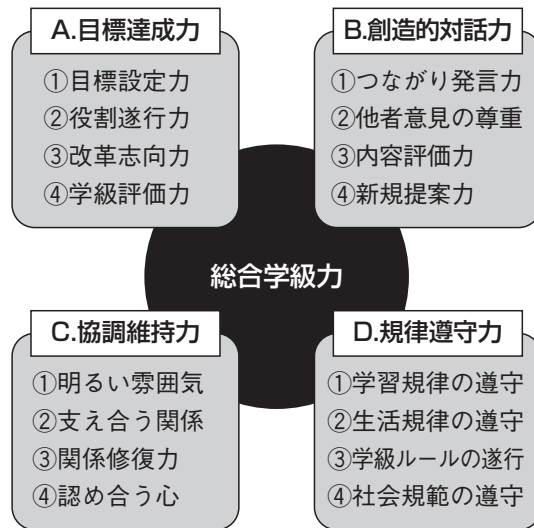
⑦ 内省評価のスキル

- 相手と自分の行動の意味や効果を考える
- 自己修正のプランを考える

○新しい修正行動の評価をする

さらに、この7つの領域と21の能力項目を、小中学校の学級経営やクラスづくりの理論と実践に照らし合わせながら再整理して、総合学級力として構想したモデル図が、次の図表7-1である。

図表7-1 総合学級力のモデル図



この図では、総合学級力を、次のような4領域16項目からなる力の総体としてとらえている。

1つ目の領域は、「目標達成力」である。いつもクラスに達成したい目標があって、子どもたちが生き生きといろいろなことにチャレンジしているクラスを理想的なクラスとして想定してみた。例えば、校内長縄飛び大会で優勝しようでも、忘れ物ゼロ作戦に挑戦しようでも、あるいは、総合的な学習の時間でボランティアプロジェクトを成功させようといった具体的な目標であれば何でも構わない。下位項目としては、①目標設定力、②役割遂行力、③改革志向力、④学級評価力がある。

2つ目の領域は、「創造的対話力」である。授業中に、友だちの意見につなげて発言ができたり、友だちの意見を尊重してよりよいアイデアや新しい考えを生み出そうとするコミュニケーションを豊かに展開できるクラスを想定してみた。また、教科学習に限らず学級会や道徳での話し合い活動が建設的であることや、昼休みや放課後のなげない友だち同士のコミュニケーションも、肯定的で新しい気づきや発見を生み出そうという創造性にあふれていることが望ましい。下位項目としては、①つながり発言力、②他者意見の尊重、③内容評価力、④新規提案力がある。

3つ目の領域は、「協調維持力」である。友だち同士で何でも相談し合える仲のよさがあり、勉強やスポーツでよく教え合ったり、けんかがあってもすぐ仲直りできるクラスを想定してみた。いいかえれば、明るく前向きで、いつも友だちのよいところを認めようとして笑いや拍手が起きるクラスであるといえる。下位項目としては、①明るい雰囲気、②支え合う関係、③関係修復力、④認め合う心がある。

そして4つ目の領域として、「規律遵守力」を位置付けたい。なぜなら、学級という組織としての公的な集団が、全ての子どもたちにとって、安心して落ち着いて学習に取り組める場になるためには、集団を構成する一員である一人ひとりが多くのルールを守らなければならないからである。そこで、学級内で多様な学習や生活のルールを守るだけでなく、それらを話し合いによって創り出していくことができる規範意識の高いクラスを想定してみた。下位項目としては、①学習規律の遵守、②生活規律の遵守、③学級ルールの遂行、④社会規範の遵守がある。

これら四つの力が、バランスよく発揮できる学級において、総合学力が最も高まるであろうという仮説を持って、今回の基本調査に臨んだのである。なお、ここでは詳細な分析は省略するが、因子分析の結果、この四領域は、ほぼモデル内で構想した調査項目と同じ項目によって維持されることがわかっている。

3 総合学級力の調査結果の検討

では、総合学級力に関わる調査結果について検討してみよう。どの項目についても、子ども個人のことについて質問するのではなく、「あなたの学級では、次のことはどの程度当てはまりますか。」という設問によって、学級全体の特色について判断してもらっている。

1 全体的な傾向について

まず見ておきたいのは、総合学級力の項目別の基礎統計である。ここでは、**図表7-2**に、小学校と中学校別に、各項目の反応形式に沿った度数分布をパーセントで表示してみた。

ここからわかることは、次の諸点である。

小学校5年生では、項目2の「友だちのためになることをしようという気持ちがある」において、肯定率が80%を超えてトップになっている。第2位は、項目12の「お互いのおかげがとがすぐに言える。」で、これについても肯定率が80%程度である。

中学校では、全体的に小学校と比べるとやや肯定率が減少する傾向があるが、肯定率の第1位は、項目12の「お互いのおかげがとがすぐに言える。」で、第2位は項目1の「学級で達成したい目標やスローガンを掲示している。」で、どちらもほぼ80%の肯定率となっている。

しかしその逆に、肯定率の低い項目や、否定率の高い項目を見ていると、日本の子どもたちの集団性に関わる課題が見えてくる。

小中学校ともに、肯定率が低いのは、項目4の「学級での取り組みの成果をよく新聞形式やレポートでまとめている。」という項目である。これは、この項目がやや他の項目と比較して、具体的な事実を特定しすぎていることが原因であるとも考えられるが、逆に言えば、学級のまとまりを高めるための活動があまり意図的・計画的に行われていないのではないかとということが予想される。

また、この他で気になるのは、小中学校ともに、項目14の「人を傷つけたり、ばか

図表7-2 「総合学級力」に関する設問項目と回答状況

設問のカテゴリー		小5(%)				項目番号	設問	中2(%)					
		100	80	60	40	20	0	0	20	40	60	80	100
目標達成力	目標設定力	8.5	21.3	30.2	39.4	1	学級で達成したい目標やスローガンを掲示している。	50.4	28.9	13.9	6.4	0.4	0.6
	役割遂行力	14.9	48.7	32.2		2	友だちのためになることをしようという気持ちがある。	21.9	51.0	21.8	4.8	0.6	0.7
	改革志向力	10.3	28.0	34.1	26.3	3	学級に、みんなで挑戦しようという課題がある。	14.5	34.7	37.5	12.6	0.6	0.7
	学級評価力	17.0	39.5	29.8	12.2	4	学級での取り組みの成果をよく新聞形式やレポートでまとめている。	55.5	17.8	40.1	35.6	0.9	0.7
創造的対話力	つながり発言力	7.9	33.3	38.8	18.9	5	話し合いつつ、人の意見をよく受け止めてそれにつながるように発言している。	7.7	34.5	41.4	15.8	0.7	0.5
	他者意見の尊重	22.5	46.5	25.4		6	友だちのアイデアや意見を生かそうとしている。	14.6	47.9	29.6	7.4	0.5	0.5
	内容評価力	6.5	29.3	41.2	21.4	7	友だちの発言のよいところをよくほめ合っている。	12.8	38.1	35.9	12.7	0.5	0.7
	新規提案力	23.1	39.5	31.9		8	クラスの話し合いの時には、新しいアイデアを出す人が多い。	14.6	35.2	37.8	11.7	0.7	0.5
協調維持力	明るい雰囲気	9.4	31.8	37.6	20.1	9	何でも話せるオープンな雰囲気がある。	20.5	32.9	32.4	13.7	0.5	0.5
	支え合う関係	22.0	40.6	31.4		10	勉強や運動で、よく教え合っている。	21.9	43.0	27.0	7.7	0.5	0.4
	関係修復力	23.1	39.3	31.7		11	いけないことは注意し合っている。	12.2	36.4	38.9	12.1	0.4	0.5
	認め合う心	16.9	39.6	38.8		12	お互いありがとうがすぐに言える。	36.1	43.8	15.6	4.1	0.5	0.8
規律遵守力	学習規律の遵守	24.8	44.4	24.2		13	決められた時間内にしっかり課題をやり終えようとしている。	10.7	41.8	37.4	9.2	0.8	0.8
	生活規律の遵守	16.6	36.2	31.5	14.1	14	人を傷つけたり、ばかにしたりしないクラスだ。	10.9	31.8	37.4	19.1	0.8	0.8
	学級ルールへの遂行	28.2	35.6	27.8		15	みんなで守る学級のルールを自分たちで決めている。	12.8	34.0	37.8	14.5	0.8	0.8
	社会規範の遵守	22.8	39.2	28.5		16	校外に出かけたときは社会のルールを守るように注意し合っている。	12.1	35.0	37.2	15.0	0.8	0.8

有効回答件数：小学5年生2,632名、中学2年生3,061名

にしたりしないクラスだ。」という項目において、大変低い肯定率になっていることである。これは、子どもたちが自分の学級の中に、いじめや否定的な人間関係の存在を強く意識していることを示している。

さらに、中学校では、項目5の「つながり発言力」や、項目13の「学習規律の遵守」においても、課題のあることが示されている。やはり中学校では、教師主導の講義形式による一斉授業が多くなることで、子どもたちの対話力の育成にマイナス要因になっているようである。また、小学校に比べて、中学校の方が生活指導上の注意をより厳しく受けているだろうという予想とは異なり、第4領域の「規律遵守力」において肯定率が低くなっていることが課題となっている。

2 総合学級力と「読解力」の関係性について

次に、本報告書の中心テーマである「読解力」と総合学級力とは、どのような関係にあるのだろうか。

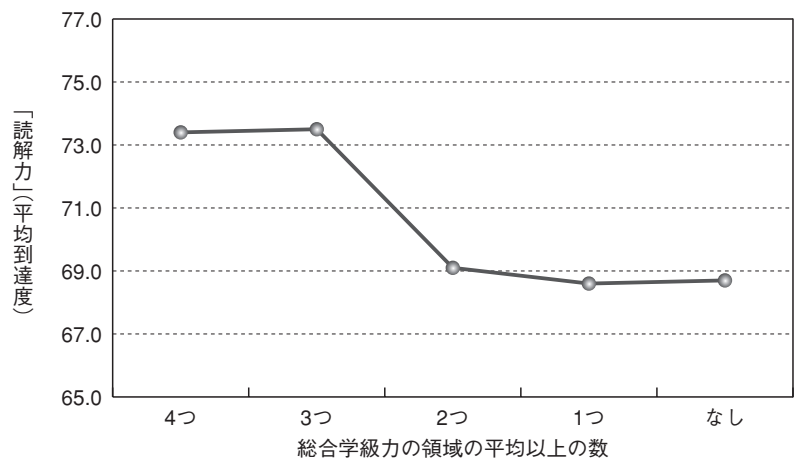
まず両者の相関係数から見てみよう。データの集計方法としては、小中学校ともに学級の値を学校毎にまとめて、「読解力」と総合学級力の得点を偏差値換算してから、両者の相関係数を算出してみた。

そうしたところ、小学校においては、「読解力」と総合学級力の相関係数は、0.52 となり、中学校においては、0.54 であった。このことから、「読解力」と総合学級力には、やや強い相関があることがわかった。

続いて、総合学級力の4領域と「読解力」の関係を検討してみたい。ねらいとしては、どの領域の力が最も「読解力」と強い関係にあるのか、さらには、どの領域がすべての土台となって、「読解力」の向上に関係しているのかという間に答えることであるが、ここでは、簡略化のために、総合学級力における全体平均値を超える領域数が増える毎に、「読解力」がどのような変化を見せるのかについて検討してみることにしよう。ここでは、データの集計は、各学校内の学級毎に行っている。

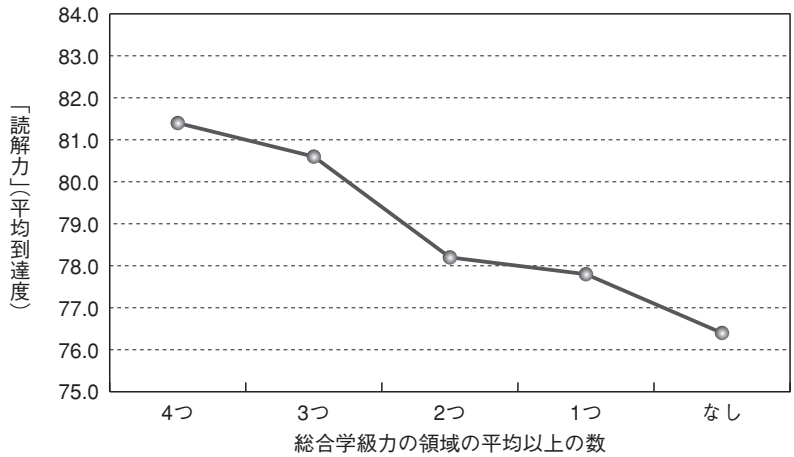
図表7-3は、小学校における「読解力」と総合学級力の関係を示すグラフであり、図表7-4は、中学校のものである。それぞれ縦軸は、本調査で作成した「読解力」調査の得点(平均到達度)である。また、横軸は、総合学級力の各領域の平均値を求めたとき、全体平均値以上であった領域の個数を示している。例えば、平均以上の領域の数が「4つ」とは、総合学級力の4つの領域(A. 目標達成力、B. 創造的対話力、C. 協調維持力、D. 規律遵守力)のすべてが全体平均以上である学級を表している。

図表7-3 平均以上の領域の数で見た「読解力」と総合学級力のグラフと表(小学校)



学級力の平均以上の領域の数→	4	3	2	1	0
読解力(平均到達度)	73.4	73.5	69.1	68.6	68.7
クラス数	26	13	13	11	27
クラス割合	28.9	14.4	14.4	12.2	30.0

図表7-4 平均以上の領域の数で見た「読解力」と総合学級力のグラフと表（中学校）



学級力の平均以上の領域の数→	4	3	2	1	0
読解力(平均到達度)	81.4	80.6	78.2	77.8	76.4
クラス数	24	9	10	9	33
クラス割合	28.2	10.6	11.8	10.6	38.8

この二つの図から明らかになったことは、「読解力」は、総合学級力の4つの領域の中で3つ以上が全国平均値より高い学級で、つまり、総合学級力が高い上位40%程度の学級で高いことである。もう少し詳しくいえば、総合学級力において高得点上位40%に入る学級とそうでない学級との間に、大きな「読解力」の得点の段差があるということである。

いいかえれば、「読解力」の向上には、総合学級力の向上が大きく関わっていることがわかった。

3 総合学級力と総合学力の関係性について

さらに、総合学級力と総合学力に含まれる3つの学力領域との関係性を見てみよう。

まず、両者の間の相関係数を算出すると以下のようなになった(図表7-5)。なお、教科総合とは、国語、算数/数学の得点を合計したものである。

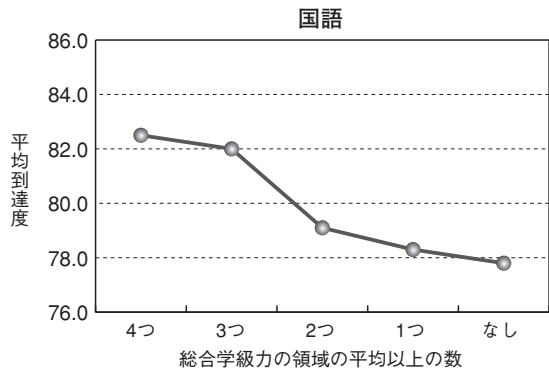
図表7-5 総合学級力と総合学力との相関係数 (小数点3位以下、四捨五入)

	国語	算数/数学	教科総合	社会的実践力	学びの基礎力
総合学級力(小学校)	0.54	0.59	0.60	0.78	0.80
総合学級力(中学校)	0.63	0.43	0.55	0.74	0.73

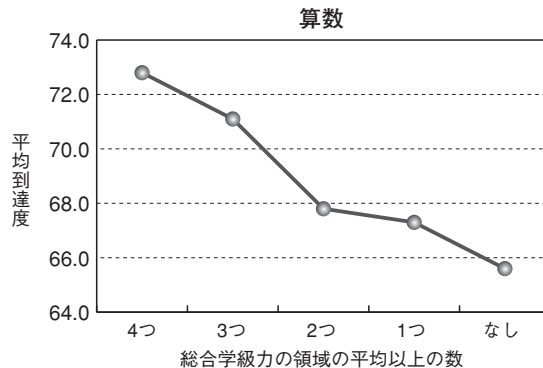
このことから、総合学級力は、教科学力とやや強い相関があり、社会的実践力と学びの基礎力との間には、強い相関があることがわかる。また、小学校の方が、中学校に比べて、相関係数が高い傾向にある。

次に、先ほどと同様に、総合学級力の各領域の平均点がどの程度全国平均値よりも高いかが、総合学力とどのように関係しているのかについて見てみよう。

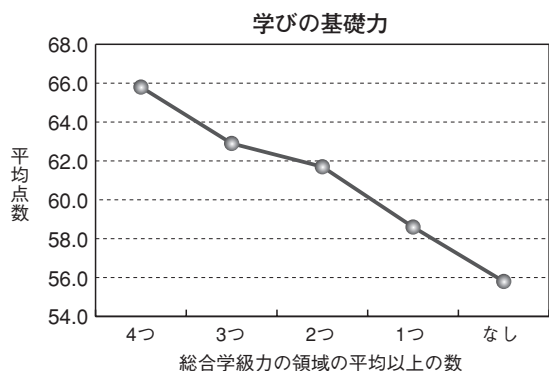
図表7-6 総合学級力の領域の平均以上の数と国語の成績との関係(小学校)



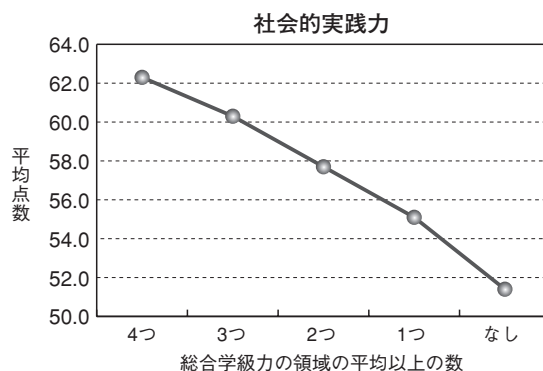
図表7-7 総合学級力の領域の平均以上の数と算数の成績との関係(小学校)



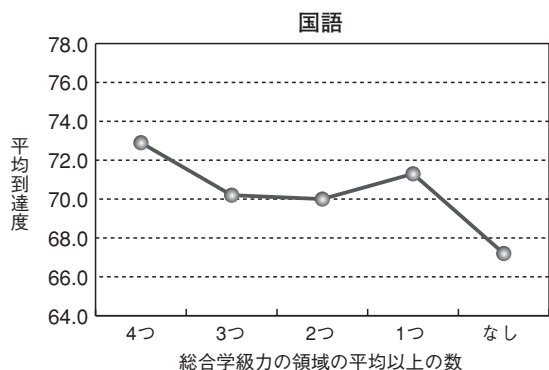
図表7-8 総合学級力の領域の平均以上の数と学びの基礎力との関係(小学校)



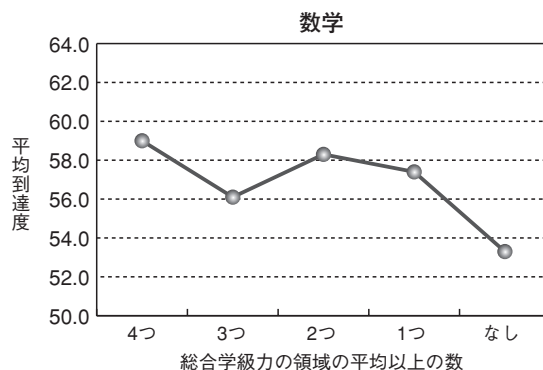
図表7-9 総合学級力の領域の平均以上の数と社会的実践力との関係(小学校)



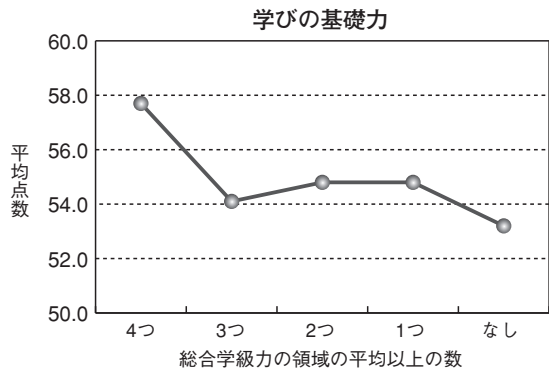
図表7-10 総合学級力の領域の平均以上の数と国語の成績との関係(中学校)



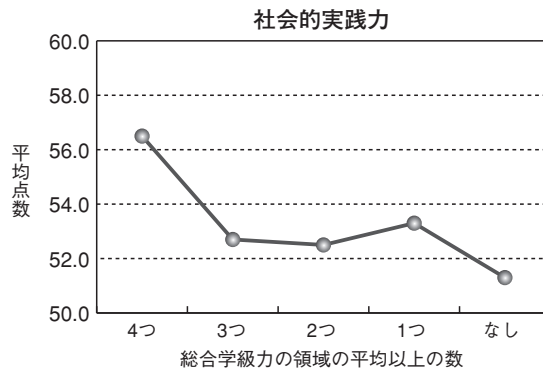
図表7-11 総合学級力の領域の平均以上の数と数学の成績との関係(中学校)



図表7-12 総合学級力の領域の平均以上の数と学びの基礎力との関係(中学校)



図表7-13 総合学級力の領域の平均以上の数と社会的実践力との関係(中学校)



どの図表からも、ほぼ、総合学級力が高い学級ほど、総合学力が高いことがわかる。特に小学校においては、総合学級力の領域の平均以上の数の違いによって、総合学力の各学力領域の平均値がほぼ一直線に変化することから、中学校と比較して、総合学級力と総合学力の関係が明確に強く存在していることがわかった。

ここでは以上のような簡略な分析と検討しかできなかったが、この結果を見るだけでも、十分に、子どもの「読解力」と総合学力の向上には、総合学級力の高まりが必要不可欠であるといえる。

やはり、子どもたちが学級という集団の中で助け合い、励まし合い、そして学び合うことが、このような豊かな学力を確かに育成するための成立条件として強く働いているのである。

4 総合学級力を育てる教育メソッド

以上のような特徴を持つ総合学級力を育てるには、どのような方法があるだろうか。

まず1つ目には、単元内で多様な出会いの場を設定することである。例えば、活動の種類としてあげてみると、地域でのボランティア活動、グループでの調査活動や共同制作、地域の人との触れ合い交流活動などがある。子どもたちが出会う人にも、年齢や地域、国籍によって多様性をもたせる方がよい。そうすることによって、解決すべき対人関係上のトラブルも多様になるからである。また、福祉教育として、高齢者、障害者、障害児との交流によって、相手を理解し、思いやり、そして役に立つ行動が積極的にとれる子どもたちを育てたい。

関わり方の機能別に整理してみると、情報を提供してもらい、自分たちの学習成果を評価してもらい、上手な方法を実演して教えてもらい、一緒に活動して楽しむ、お礼状やお礼の品物を受け取ってもらいといった多様なものが考えられる。子どもたちにはできるだけ多くの場面を体験させてやりたい。

2つ目の方法は、子どもたちに自分の成長を自己評価させることである。単元内に、「ふりかえりの時間」を設定してもよいし、子どもたちに渡す学習カードの中にこうした学級力の項目をわかりやすく整理して、定期的に自己評価させても効果的である。このとき、いつも決まって教師が用意した項目で自己評価するだけでなく、次の単元で伸ばしたいと考える力を書きとめさせることによって、次の学習計画の立案の段階で、自己目標を自分で意識的に考えられるようにしたい。

いわゆる社会的スキルトレーニングにおける体験学習のプロセス(具体的な体験→体験の内省と観察→一般化をする→仮説化をする→新たな具体的な体験)が参考になる(Kolb et al., 1971)。つまり、内省の段階がいわゆる自己評価であり、一般化が道徳の時間にみられるような人間の望ましい社会的規範や行動様式による考察にあたる。そして仮説化の段階で、自己目標を決めたり、活動計画を考え出したりするのである。

このことから第3の方法が考えられる。つまり、道徳の時間との連携を図ることである。従来の読み物教材による話し合い活動を中心にした道徳の授業は、この体験学習モデルにおける一般化の段階を取り出したものである。しかし道徳的实践力や、社会的ス

キルの育成をねらいとするならば、自らの具体的な体験に基づいて内省・一般化・仮説化というプロセスをふむことが大切であることを行動療法の研究成果は教えている。

そして最後にあげたいのは、教師や友だち、そして子どもたちが活動を通して関わった多くの人たちからの励ましや肯定的評価の大切さである。時には厳しい意見をもらったり、乗り越えるべき多くのトラブルを持ち込んでくることもあるだろう。しかし、長期的には支持的な人間関係を作り上げられるようにするのが支援者としての教師の役割になってくる。

この他にも、ドラマ教育によるワークショップや、人間関係エクササイズ、サークルタイムや子どものための哲学など、学級内での子どもたちの人間関係スキルを向上させる様々な教育手法が開発されているが、また別の機会に詳しく紹介することにした。

5 「読解力」向上のための提言 10 か条

では最後に、「学力向上のための基本調査 2006」によって得られた知見を整理することによって、「読解力」向上のための提言 10 か条を作成してみたので紹介しておきたい。

どの項目も、今回の総合学力調査で得られたデータの裏付けがある。つまり、科学的な根拠をもとにして作られた「読解力」向上のための教育指針であるといってよい。

これを参考にして、各学校で、子どもたちの「読解力」向上のための教育が広く行われるようになることを、総合学力研究会のメンバー一同、心から願っている。

[参考文献]

1. Kolb, D., Rubin, I.M., & McIntyre, J.M. 1971 *Organizational Psychology: A Book of Readings*. Prentice-Hall.
2. 佐藤正二「子どもの社会的スキル・トレーニング」相川充・津村俊充編『社会的スキルと対人関係』誠信書房、1996年、pp.173 - 200。
3. 庄司一子「子どもの社会的スキル」菊池章夫・堀毛一也編著『社会的スキルの心理学』川島書店、1994年、pp.201 - 218。
4. 和田実「社会的スキル尺度のこと」菊池章夫・堀毛一也編著『社会的スキルの心理学』川島書店、1994年、pp.184 - 191。

「読解力」向上のための提言 10 か条

「読解力」向上のための視点は多数考えられるが、今回の調査を通して改めて重要性が明らかになったのは、特に以下の諸点である。

- 1 「読解力」の向上には、教科学力だけでなく、社会的実践力と学びの基礎力を含めた、子どもの総合学力を高めることが必要である。
- 2 「読解力」の向上のためには、読解の基本的指導、論理的思考の訓練・演習、表現活動の指導という3つの指導法を、各学校の実態に応じてバランスよく実施することが大切である。
- 3 文学だけでなく、自然、社会、人間に関する多様なジャンルの本や資料を、幅広く読ませることが「読解力」の高まりにつながる。
- 4 特に、新聞や雑誌記事などの素材を用いて、現代的な課題や社会事象について知識や語彙を豊かにさせることが大切である。
- 5 各教科及び総合的な学習の時間で、課題探究型の活動を行わせることが、子どもの「読解力」向上につながる。
- 6 文章や資料を読ませる際には、何のために読むのか、そして、読んでどうするのかといった、読解の目的や活用についても考えさせることが大切である。
- 7 グループで読んだことについて討論させたり、批評会や話し合いによる交流活動をさせたりして総合学級力を高め、「学び合う集団」を形成することが大切である。
- 8 ICTを多彩な情報活用と組み合わせ、教材提示や思考支援、そして、表現活動に取り入れることが、「読解力」の向上につながる。
- 9 子どもの「読解力」向上のためには、学校と家庭が連携して、豊かな取り組みや働きかけを行うことが必要である。
- 10 学校での「読解力」向上のための基盤整備を含めた総合教育力の育成が、子どもの「読解力」向上につながる。